

林芳兵衛・中井三郎兵衛談話速記

旧三井文庫が三井家史編纂事業の一環として、維新政府の太政官札発行流通と三井との関わりを調査収集した時期がある。そのさい古老林芳兵衛と中井三郎兵衛から聴取したものが「林芳兵衛八十二歳翁談話速記録」および「中井三郎兵衛談話速記録」である。

聞き手は両者とも旧三井文庫員柴謙太郎および尾上米蔵。速記者は本文末尾に京都市役所、京都市会囑託岡部荒二と記されている。

林芳兵衛への聞き取りは昭和五年一月一八日から四日間に分けて行われた。話は太政官札製造から発展して、幕末の出版業界や、三井家の別家井上治兵衛等に及ぶ。第一回目的主な内容は、太政官札とその原版作成に携わった松田玄々堂と銅版について、第二回目は、玄々堂やその外の銅版師、木版師の仕事について、また太政官札の流通、幕末維新期の出版業の話についても語られる。第三回目は林芳兵衛自身の履歴

と親類縁者の木版師井上治兵衛についてが主な内容であるが、中に三井家の寒中施行の話もでてくる。第四日目は記録を取っていない。

一方の中井三郎兵衛の聞き取りは林芳兵衛の聞き取りの合間に行われており、内容も薄くてごく短いものである。中井は紙屋ではあるけれども、太政官札の用紙を調達した訳ではなく何ら関係がないので、幕末期の自身の丁稚時代の体験エピソードを語るにとどまっている。

太政官札とは、維新政府が明治元年五月に発行した紙幣で、一〇両、五両、一両、一分、一朱の五種類の金札のことである。明治元年閏四月から翌二年五月までに最初の四万八〇〇〇両が発行され、その彫刻と印刷に当たったのが玄々堂松田山兄弟である。後には石田有年も銅版彫刻に加わっている。版下書は平野屋四方茂平（後に遠藤と改姓）が行った。

柴謙太郎らは、太政官札発行に関わったこれらの人々の事

蹟も同時期に調査した。その調査内容は、三井家の勤王奉公事歴の一つとして昭和七年七月にまとめられた「太政官札の発行流通を主として見たる三井家維新奉公事蹟」と言う手書き印刷の内部調査報告書に盛り込まれている。

松田儀十郎、号緑山は天保八年京都に生まれた。父儀平から銅版彫刻の技術を学び、水戸、摂津、美濃などに招かれ各藩の藩札彫刻にも従事した経歴を持つ。文政五年（一八二二）以降伊勢松坂で発行された銀札の製造は、京都の三井組が行っており、その木版彫は井上治兵衛が引き受けていた。

この延長であったわけだが慶応二年の紀州五カ国通用札の印刷は、井上治兵衛の薦めで銅版印刷と木版の混用となり、松田儀十郎も関わった。維新政府が三井に相談を持ってきたのは、三井の紀州銀札製造の経験によるが、太政官札の銅版印刷引き受けにはこのように三井―井上―松田という下地があったのである。林芳兵衛の、第一回談話には太政官札が北三井家高朗の推挙した出入の木版師井上治兵衛の意見で松田玄々堂（緑山）の銅版刷りになった事について、経緯が語られている。この事実は太政官札と三井の維新政府との関係を探っていた聞き手の柴謙太郎等にとってこの上ない情報だったであろう。前掲調査報告書の中で「近年までも全く隠れた大なる事実」「井上治兵衛は木版師である、それと銅版師松

田敦朝との関係は、種々なる調査研究の結果、今日極めて明白に判明する事を得たのである」と記しているのである。松田緑山は初め名を保信といい、明治二年には民部省并に通商司三井組の紙幣製造も命ぜられて東京に出、後敦朝と名乗った（なお銅版師石田有年も松田とともに東京で紙幣製造に当たっている）。銅版が重宝されて、大蔵省や工部省、海軍省など御用を数々引受け、明治三年一月出納局より、明治五年正月には郵便切手製造御用も拝命している。

林芳兵衛については前掲報告書の中で「今年（昭和七年）四月まで生存した一老人」という表現がなされているから、聞取りから一年四カ月後に亡くなったのであろう。林芳兵衛は嘉永三年（一八五〇）の生まれで、聞取りの実施された昭和五年には満で言えば八〇歳であるが、記憶はかなりしっかりとおり、こと印刷や出版業界の事情に関して幅広い知識を持っていることに驚嘆させられる。

林芳兵衛は京都で文泉堂という書店を経営しているが、三井家とは直接つながりはない。が、木版師で京都を代表する同業者でもある井上治兵衛家と重縁があり、この井上治兵衛の初代が北三井家から出た別家であった。「林芳兵衛八十二歳翁談話速記録」の本文の前には井上治兵衛家と林芳兵衛家の関係略系図が綴じ込まれている。両家の関係系図をみると、

井上治兵衛家は談話者の二代芳兵衛の祖母の実家であり、母の養家である。また二代芳兵衛の姉は四代目井上治兵衛の妻となっているので、林芳兵衛が井上家について詳しいことも不思議ではない。二代林芳兵衛と五代目治兵衛は叔父、甥の間柄にある。それで林芳兵衛の談話には、井上治兵衛の三代目が（五代目の）「祖父」としてしばしば登場する。そこで図らずも三井家の別家としての越後屋治兵衛家と事業の実態をも知ることが出来るのである。

両家がどのような仕事をしてきたか、井上和雄編『増訂慶長以来書賈集覧』（大正五年初版、昭和四五年増訂版）をみると、林芳兵衛は「文泉堂 弘化―現代 京都二条通高倉東入北側 吉野屋（林氏）権兵衛の後を襲ひて堀川塾（伊藤）の蔵版を製本発売す」とあり、また井上治兵衛については、「越後屋治兵衛 井上氏 東塘亭 天明―明治 京都堀川通二条下ル 代々彫工にして書賈を兼たるもの、如し、先年廃業して東京に移住せりと云」と紹介されている。文久四年版「都商職街風聞」の、〈板木師〉のところには「堀川二条下 井上次兵衛」と記載されており、この出版元には林芳兵衛が名を連ねている。明治一年の「売買ひとり案内」でも版木師井上治兵衛を確認できる。（この「売買ひとり案内」の〈銅版彫師〉の中に「石田有年」の名も見られる。）

ここで井上治兵衛家の履歴をみてみよう。明治四年に北三

井家に提出された「御暖簾調帳」（北七七四）では、初代治兵衛が「延享二五年下男御奉公出勤」と記されていて、延享二年（一七四五）（北三井家四代高美の時）に出勤し、宝暦九年（一七五九）（五代高清の代）に宿入したとある。勤仕期間一四年での宿入は通常店奉公人では無いことなので、中年奉公であろう。但馬の出身と云うことでもあり、記述どおり最初は下男であった可能性もある。二代目治兵衛以降は奉公に上がらず、木版師と出版業で家を繋いでいる。主に地図類の中に彫鑄、出版井上治兵衛、又は越後屋治兵衛の名を見いだすことができる。⁵⁾そして北三井家の堀川町の家代を代々勤めてきており、また北三井家の勘定場の出入りも代々許されている。住居も北三井家邸内借地にあり、親密な付き合いがあったと思われる。初代が越後屋本店や三井両替店など商売のノウハウを学んだ営業店の手代ではなく、家の台所役であった者が、暖簾分けのさいは技術を必要とする木版師となり、また代を重ねて京都を代表する出版業者ともなったことは、別家として成功した例であろう。⁶⁾四代目治兵衛は店の職人から養子に入ったが、明治一六年に死亡している。五代目治兵衛は、名前は継いだものの、北三井家勘定場に願って商業学校卒業の翌年明治二五年に三井物産に入社して東京に出たため、店の方は廃業してしまった。廃業した五代目は林芳兵衛の談話聴取時は三井物産会社の取締役となっていて、昭

和七年には常務取締役、次いで昭和九年に取締役会長で代表取締役となった人物である。

「中井三郎兵衛談話速記録」は前述したようにごく短い。中井三郎兵衛は三之助という名で京本店に丁稚（子供）で勤務し、慶応二年半元服して、丸額から角額になったところで退職した。この中井三郎兵衛は四代目である。

別家としての経歴を紹介しておく、初代は明和元年（一七六四）江戸本店組頭となり、明和三年江戸で没している。

二代目は養子で三井家には出勤していないので家格は組頭退役であった。三郎兵衛の三代目は天保三年（一八三二）に京本店に出勤、天保一三年（一八四二）に平役で退職したにも拘わらず、弘化二年（一八四五）に開業、安政六年（一八五九）に大元方より「家業出情大切ニ相勤候付」家格を支配退役に引き上げられ丸に井桁三の暖簾印を貰っている。明治三年（一八七〇）に名を三平と替えて、北三井家の台所名前役になっており、翌四年七月京都三井組為替座にも通勤支配役を兼任、一〇月には後見役、その後は大元方改役と三井銀行の要職につき、明治一八年より二五年まで銀行副長となっている。二六年には三井組参事兼理事心得、最後は二八年元方委員で引退した。この時七五歳であった。

(1) 京都における寒中施行については、塚田孝「三井文庫所蔵の三都非人関係史料」(『三井文庫論叢』第二

三号)に越後屋京本店、三井京両替店協同分担による施行の詳細なデータが紹介されている。毎年一月中旬から一月中旬にかけて非人に粥を振る舞っているが、対象者の人数は幕末期二〇〇〇人を越える。林芳兵衛の談話では、「毎朝油小路から出て」とあり、油小路にあった北三井家が施行を行っていたかのごとくであるが、疑問である。

(2) 「第六世松田儀平源保居略歴 附第七世儀十郎源敦朝履歴」(『三井文庫所蔵史料 特八四〇〕。なおこの履歴では「門弟約五千名ヲ指揮シテ金札五千万円ヲ製造ス」とある。また、林芳兵衛の談話中に松田儀十郎の兄弟を三人としているのは、銅版印刷製造に関わっているのが三人なのであって、実際は八人兄弟(うち女子は二人)である。

(3) 三井文庫所蔵史料 特一〇七五。

(4) 太政官札の表面下部の双竜の図柄が明治四年三月発行の郵便切手に踏襲された(『日本銀行調査局編』『図録日本の貨幣 7 近代幣制の成立』(東洋経済新報社、昭和四八年) 図版解説)。

(5) 井上治兵衛の手掛けた仕事で三井文庫が所蔵する地

(6)

図は「改正日本輿地路程図」(安永乙未三月柴野邦彦序、水戸長久保赤水著、文化八年正月再刻、京都井上治兵衛鑄字)(江戸版)(鳥別五)、「日本郡国一覽 改正」(C五〇一―四六)等の木版の鑄刻があり、刊行したものには「文久癸亥西川通船路新開図」(C七四二―六)、「銅鑄機内近州覽図」(C五四〇―五)、邸第図「洛西桂御別荘明細図」(C八二七―一〇)等がある。因みに「銅鑄機内近州覽図」は銅版で、慶応二年版、松田緑山の刻、「洛西桂御別荘明細図」は西村兼文編、国井応文画の木版である。三代目治兵衛は後治右衛門と改名するが、元治元年の禁門の変で暖簾が焼失したらしく、明治一年八月に丸に井桁三文字の暖簾印を改めて取得している。そのさい三井家大元方役の小石川三井家当主高喜は、中井三平宛書状(三井文庫所蔵史料 小石川一四四二―一八一)に「井上次右衛門方近年商業大勉強、依而身上も追々宜相成候段目出度事二候」と書き送っている。

(樋口知子)

凡例

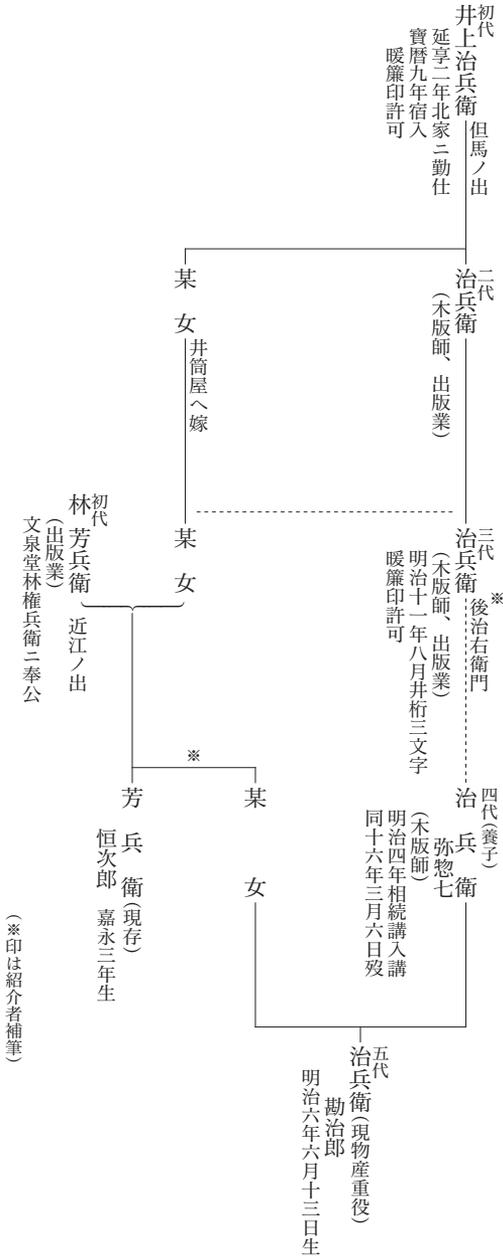
- 一、漢字は原則として通用の字体を用いた。
- 一、明らかな脱字は行間に(ママ)と入れたが、それ以外は原文通りである。
- 一、句読点の。、は原文通りである。
- 一、頭注は原文の当該箇所の下に*印を付し、ポイントを落として挿入した。なお頭注自体に疑問のある箇所もあるが、原本のままとする。

〔表紙〕
「林芳兵衛八十二歳翁談話速記録」

〔三井文庫所蔵史料 特八四三〕

井上治兵衛家略系 特二林芳兵衛関係

昭和五年十二月調査



ことは出来ませぬ。それで太政官でも是はよいといふことで銅版に決まつたのであります。それで玄々堂が召出しになつたのです。太政官から井上を呼出されて井上が玄々堂のことを申上げた為に玄々堂が召出されたのですから、玄々堂は何時でも井上のお蔭で是だけになつたのだといつて喜んで居つたさうです。

太政官日誌はあれは、唯々今度日誌を至急出して貰ひたい、井上を太政官に呼出して、其時分には太政官は二条の城にありました、井上は堀川南に居りました、慶應四年の春、(何日頃でしたか、日は思ひ出させませぬ)太政官に呼出されたのです。何しろ夜になつて、「明日出頭せよ」と言つて来たのであります。さうして出頭すると、「瓦版といふものは非常に早いさうである、相撲の勝負附などにやつて居るやうである」といふので其ことを井上に御相談になつたのです。「それは聞いて居ります、蠟版でありまして相撲の勝負附などにやつて居るのですが、私の方ではしたことがありません、何しろ判じねば読めぬやうなものです」「そんなものではないかぬ、何か外に早く刷れるものは無いか」そこで活字版(今は金ですが昔は木の活字でした)といふのがあります「それでやつて呉れ」といふことであつたのですが、井上は「それでは却つて早いか遅いか判らぬやうになつてしまいます、それよりか此方がよい」といふことでやつたのが、太政官日誌は

御承知の通り片仮名ですから木版なれば大抵朝からやれば昼頃までには彫れます、一枚の版木を何ほにも切つて置いて、版下を貼つて後、之を切り放し何しろ一面を四人で彫るので、すから早い訳です、それを合釘を入れて一つに嵌込むのです、晩に太政官から草稿が来たら翌日の昼頃までには納付して居りました。太政官日誌は御承知の通り半紙版であつて三百部を太政官に納めて居りました。あとは何ほ売つても構ひませぬ。

それは太政官日誌の話ですが、太政官札のことを太政官から御相談を受けた三井さんが井上の今の三代前に御相談になつたのです。そこで井上は今申上げたやうに、木版は賈が出来やすい、それより銅版でやつた方が彫る人が日本に一人しか無いからその方がよいといふやうなことを話したのであります。三井さんから太政官に其ことをお話すると「それは非常に面白い、何といふ奴か」「松田と言ひます」「それでは、それを召出せ」といふことでお召出しになつたのです。さうしてあれが出来たのですが、此松田緑山といふ男はそれまでは大きに貧乏をして居つたので、一枚彫りの板を持つて来ては金を貸して呉れといふやうなことで大きに貧乏をして居つたのです、五条坂に住んで居りましたが尻の据らぬ男で方々宿替をして居ります。

気が向かないと十日でも二十日でもやらうとしない、「そ

れはいかぬ」といふと「どうも頭が痛うて仕事が出来ぬ」といふのです。「米はきれたし金を貸してんか」といつて来る、私の方でもやりかけたものを途中でやめられては困るので、外の人にさせやうにもする人が居らぬので何とかして金を貸してやつて居りました。さういふことで大分長いことかかつて出来上つたのがあの日本の図※天日本
国細図です。日本の図が出来上つたのが大変に時期がよかつたのです。縮図も拡大もやります。銅版の方は拡大することは余計ありませんが大抵縮める方です。外の人ではさういふことはやうしませぬ、玄々堂はそれが大変にうまいのです。それから図といふものは銅版に限るといふことになつたのであります。それに細かいことは銅版でなければ出来ませぬ。銅版は針でやるのですから、木版では出来ないことが銅版では出来ます。

銅版の彫方は先づ銅板に薄い蠟を引いて、其上に針で左向きに書くのです。下絵はありませぬ、草稿はありますが、ぶつつけに彫るのですから左向きに彫ります。彫り上つたら其上に薬をかけて、何分とか何時間と時間を定めて、薬がかかつたら水で洗つて、今度は火にあて、蠟を落し、さうしてそれに砥粉をつけて磨くのです。薬をかけて何分とか何時間経つたらうまく銅板が腐るかといふことは多年の経験でよく知つて居ります。細かいものは眼鏡で彫ります。刷る時には松煙と荏油を煮てインキを造り、それを竹のへらで銅板一面に

引き又竹へらで取つてあとを梅酢で拭きます、それに湿した紙をやつて轆轤か何かでキュー／＼とやるとニユー／＼と出て来ます。梅酢をかけるのは、版の上に残つた油が取れて、紙に出ない為です、又紙を湿めすのは、湿り気が無いと中からインキを吸ひ出す事が出来ないからです。轆轤といふのは私の所にもありましたが方々の刷屋に貸してそれきりになつて居りますが極く簡単なものです。一枚の版で一万でも二万でも取れます。

太政官札は何枚版を彫つたのか知りませぬが四方茂平（六角東入つた所に現に子孫が居られます）といふ人が版下を書いてそれを玄々が写したのです。太政官札を刷る人は百人位は入つて居つたでせうが、皆玄々の太三郎が主となつて刷り人を仕立て、居つたのであります。それから後に民部省が東京に出来るやうになつてから玄々が東京に行つたのであります、玄々が東京へ行つた後は其弟子が何人か此方に残つて居ります。それで彫質なんかも無茶に安くなりました。それまでは一枚五円から十円位の刻料を取つて居りました。

贖札ですか、ありましたが、腹を切りました、私の方にもよう仕事に来て居つた男ですが、元何処かのお公卿さんの侍でしたが、維新後になつて、刷り人に傭はれた。それが贖札をした。発覚したと思つて腹を切りました。そんなもので、公けに捕へられた者は無いやうです。贖札は是ぢやと言つて

見たこともありませぬ。

水では版面の油が取れませぬので梅酢を使ひますが、梅酢も赤いのはいやがります、紫蘇を入れぬやつです、水一升に梅酢四合位の割合ですが、梅酢を多量に入れると板全体が腐りますから水で薄めます。

玄々堂の外に石田※石田有年かといふ人がありました、是も随分古い人で、東洞院四条下ルに住んだ。水口藩の留守居ですが廃藩になつてから銅版を主にやつて居りました。玄々堂とは別派です、何処から習つたのか知りませぬ。

津久井※津久井平塚清影著「理蹟」は平塚です。平塚の縁故の人が何か平塚のものを記念に遺して置きたいといふので、私と井上が買った版木の一部分が昨年まで私の方にありましたが、平塚の子孫の人が、大阪の人ですが見えました、自分の方に平塚のものが何も遺つてない、何か遺して置きたい譲つて呉れぬかといふことで其人に譲りました。利益を取る為でないから恐らく本になつては出しますまい。

第二回 十二月十九日
前 同所

訪問聴取者 前 同人

玄々は京都に居つた時分には松原の清水に行く所※鷺尾町ナルベシに居りました、此頃は大変によくやつて居りますが、其時分

はなか／＼ひどい所でした、女郎屋などがありまして洵に仕様の無い所でしたが、静かではあるし家賃も安いのでさういふ所に居つたのです、非常に物騒な所でした。

此銅版が出来たのは天保ですが医範提綱はもつとズツト前に出来ました。初めは長崎辺で和蘭人がやつて居つたのを誰かが習つて来たのでせうな。玄々は誰に習つたか知りませぬが、余程前からあつたらしいです。医範提綱はなか／＼よく売れました、是れさへあればお医者さんが出来たのですから。今は東京も京都も大阪も古い本屋は一軒も無くなりました。

玄々の彫つたものでは法華のお守りなどはなか／＼古い方です、法華経を銅版で細かく彫つてあるのですが、之を皆胃の中などへ入れたものです、私の方にも井上の方にも仰山ありました、今でもあります。それから扇面の祇園祭の行列などの小さいものです。

昨日も申しましたが、日本の図が出来てから銅版といふものが世間に認められまして、細かいものなら銅版に限るといふことになつたのであります。石版などはありませぬし、細かいものは皆銅版でやつて居りました。

大阪の兼葭堂※兼葭堂遺意岡田玉山編述「唐土名勝図会」井上治兵衛等彫刻がやつた唐土名勝図会などは非常に細かいものです。是は木版です。当時は木版師の腕の切れるやつが沢山居りました、今日と違つて彫り賃の競争より仕事の競争を盛にやつて、あの

男が之をやつたから自分は之をやつてやらうといふやうに競うて緊張つて居りました。それで其時分にはなかく、よいものがありました、菊池容齋きくちようさいの「前賢古実ぜんけんこじ」なんかはなかくよく出来て居ります。銅版にまけぬ出来ばえです。今申した唐土名もうじ所などもよく出来て居ります。刷屋も亦大変に上手でした。今のやうに墨さへつけてやればよいといふやうなのと違つて大変上手な刷屋が居りました、如何に上手に版が彫つてあつても刷屋が下手では折角の版木が引立ちませぬ。瓦版といふのはありませぬ。蠟版ろうばんはありました、昨日申しましたやうに相撲の勝負附——番附は木版の立派なものです——などをやつて居りました、是は詰り蠟を何かで伸ばして、それを小刀でキュー／＼と彫つて、それに墨をつけて馬棟ばぢでやるのです、粗末なものです。

平塚瓢斎といふ人の外に池田東籬亭といふ人がありますが、此人は多少ものが読めた男です、学者といふことはありませぬが、何でもやつて居りました、絵も書きました、あの人の拵へたものはたんとあります、非常に器用な人で何でもやります、さういふ人が沢山居りました、玄々堂は縮図はやつて居りましたがさう何でもやるといふ男ではありませぬ。

桂淡水*桂平馬といふのは玄々堂の弟子です、緑山の弟子です、土佐の人ですが京へ出て来て浪人して居りましたが、玄々堂の方で銅版を教へて貰つたのですが、土佐で国札を作

るやうになつて、皆此方の刷屋なんかも土佐へ行つたのですが、土佐の国札は玄々堂は一寸もしませぬ、此桂といふ人がやつたのです。

淡水の外に国札をやつた人*石田有年に水口——玄々とは派が違ひます、何処で習つたのか知りませぬが少し下手でした、元水口藩の人で、水口の屋敷は東洞院四条下ル所にあつた其処の留守居をして居りましたのですが、廃藩になつてから専ら銅版をやつて生活して居りました、其頃は銅版刻りは仰山居りました、藩札をしたのは土佐が一番です、国札は何処にでもありますが皆木版です、銅版の藩札は土佐が一番です。太政官が一番初め、それから次が土佐です。紀州でもあつたのでせうが皆木版です。土佐の外に銅版を使った所はありませぬ。

遠藤茂兵衛*平野四方茂平といふ人は池田みたやうな器用な人で、前は本屋でしたが版下屋になつてしまつたのです。洵に器用な人で図も引きますし何でも出来た人です。

太政官札はそれ／＼藩に向けて渡した、何処は何ぼ、此処は何ぼと藩に向けて渡したのです。江戸では通用しませぬ、本屋のやうな商売でも江戸で取引のあるものは正金でやらなければならぬのです、さういふ工合で取引が誠に不便でした、それが朝廷が江戸においてになつて二度目になつてから全体に通用するやうになつたのであります。よくそんなものが通

用したなあと仰しやるのですが、それはやはり政府の偉力で愚図々々言ふと引張つて行つて罰します。尤も其始まりは戦争の時分に吾々は皆正金を出して居ります、政府へ献金をして居ります、金が無いと兵隊を出すことも出来ないが政府の方に金が無い、それで皆な吾々の方で身分に応じて政府に金を出したのです、私の所からは百両出しました。其金を何処へ持つて行つたかよく知りませぬ、大年寄といふものがありました、それへ持つて行つたのかも知れませぬ。

それには政府がおやりになるのだから苦しくても何でも持つて行かなければならぬといふやうな気持もあつたのでせうが、江戸の町民は幕府のことを思ひますが、京は人民が旧くから幕府のことよりも御所の朝廷の方に重きを置いて居りました。

元治の火事にはエラ焼けです。私の十五の時でした。此辺は焼けなんだのですが私等は早くから清水に逃げました。父は焼けるまで此辺をウロついて居つたさうですが、夷川辺で火は消えたのです。何しろ火が消えかゝるとドン／＼打込むのですから、とう／＼橋まで焼いてしまひました。鴨川の河原は避難した人で一杯でした、あれが冬やつたらさつぱりですが夏であつたので大助りです、其時分には今日のやうに義捐や何といふやうなことはなく焼かれた人は焼かれ損です。

御一新前後といふものは京へ諸藩が皆入込みますから焼か

れて一時は困つたのですが其為に変な金が京の地へ落ちて居ります。焼跡は金のある人は建てます奉行所の方でも世話して困つて居る人は救ふやうな施設はあるにはありましたが何しろ焼けたのが大きいものですから、七月十九日でしたか、朝起きましたらワア／＼といふ関の声が揚つて居りました、それで父が何ぢや、やかましい声がするなといつて屋根へ上つたら、長州が蛤御門で戦つて居る其声です、それからゴテ／＼言ふて居る中に柳馬場へ下から長州がやつて来たのです、伏見で大垣が喰止めたので、それから道を変へて入つて来たから遅れたのです、遅れたといつても蛤御門の戦が夜の暁方からで、柳馬場へ来たのが夜が明けてしまつて朝飯が済んだ時分です。私も見に行きましたが丁度旗を立て、入つて来てそれが丸太町の堺町で戦つたのです、それが鷹司邸に向けて乗込んで入つて其処で戦ひました、其時鷹司さんへ向けて火を放つたので、それが此方に焼けて来たのです、嵯峨の天龍寺まで焼けてしまつたのです、随分無茶なことをやつたものですね。

御一新近くになつてから京の方には、志士浪人が方々からやつて来ます、幕府の役人も来ますから、それが沢山金を落しますので商売は皆繁昌です。本屋なども宜しう御座いました。今までは御所のことを調べて居らなんだものが、俄かに御所のことを調べねばならぬといふので、その方の本が大に

売れて本屋の方では大変儲けて居ります。朝廷に関する本が非常によく売れましたので本屋は御一新後は非常に儲けて居ります。外国の本の翻訳物が売れたのはそれからずつと後です。平田のものはよく売れました。

出版屋の大きいのが京に沢山ありました。沢山といふこともないが大抵皆版木を持つて居ります。出版の多いのは何と言つても京です。東京は徳川さんからですが、京は秀吉時代からです。昌平学校で物を拵へるやうになつて江戸にも職人が沢山出来ました。

本屋が此本なら此本を持つて居るとすると、之に似寄つたものはさせないです。之を持つて居る所へ行つて相談しなければ出来ないといふことになつて居りました。本屋の約束といふものは大変に厳格なものであつたのです。今も同じですが、物を拵へると届をしなければならぬ。届をするのには草稿を添へて出さなければいかぬ。それが物に依つては江戸の昌平学校へ行つて其処で調べて許可すると、奉行所の方で許可して呉れるのとあります。斯ういふものはどうでもよいといふやうなものは奉行所で許可しますが、政治なんかのことが書いてあるものは許しません。徳川さんのことを書いたものは頭から許しません。本屋の仲間といふものは又大変に厳格なものです。本屋行司といふものが、上下に二つあつて、上に四人、下にも四人ある。是が出版物なんかを取扱

ひます、其処へ本屋から出して其処で纏めて奉行所に出すのです。奉行所の方で奉行所限りで許して呉れるのと、江戸へ廻はすのと区別します。個人が持つて行つても奉行所は受けませぬ。必ず本屋行司の手を経ずには受付けませぬ。それで本屋行司は威張つたものでした。本屋行司が奥書をして出すのです。御一新になつても暫しはやつて居りましたが後にはやめになりました、中々出版も容易には出来ませぬ。本屋の仲間に入るの容易です。銀二歩程出したら宜しいホン入とセリコ入と二歩です。

井上は自分の方で刷らずに版木を貸して貸賃を取つて居りました。私は嘉永三年七月生れです。

第三回 十二月二十日
前同所ニ於テ 訪問聴取者 前同 人

今の治兵衛の母親が私の姉になるのです、姉が此処から井上に嫁入つたのです。今の井上の祖父の姉、それが私の母親ですが、此母親といふものは井上から嫁に来たのですが、母親の母親が外へ嫁入つて私の母親を生んで死んだのです、當時まだ私の母親が幼年であつたので嫁入先から井上に引取つて井上から私の方に来たのです。井上の姉が井筒屋（河原町四条）へ嫁入つて私の母親を生んで死んだのです。其処は零

落して今家はありませぬ。そこで井上の方へ引取つて井上で成人したのであります。私の母親は井上から出たには違ひありませんが、一旦井筒屋へ嫁入つて私の母親を生んで死んだので、家の都合が悪かつたと見えて井上に小さい時から引取つて井上の方で成人して私の所に縁付いて来たのであります。

林茂兵衛といふのは私の親が奉公して居つた所です、親族でも何でもありません。其主人といふのが私の親の在所から出て居る。其縁故で親が丁稚奉公に来たのです。私の親は滋賀県の栗太郡田中です。私は林芳兵衛の二代目です。林茂兵衛の家は今絶家して居ります。実は此看板※文景堂の題額は大雅の書も家と一緒に何処かへ売つてしまつたのですがあとで私の親が、あれが欲しいもんやなあといつて居りましたが何処に在るか判らなんだ。それが妙なことに夷川の道具屋に出て居つたのです。余程年数が経つてからでせうが、其時分親も宿替の仕立てゞビリ／＼して居つたのですが之は大きに私の方に縁故があると言つて喜んで買取つたのです。それから一つ大雅の山水の屏風がありました。それが百両でも買手が無い。大雅の屏風といふものは大変評判の屏風で、祭になると其屏風を見せて呉れといつて見に来る人が多いので、丁稚が番をしなければならぬ。祭が来ると、今度はお前の番だ、今度は俺の番だといふやうな具合で、番に當つた人は何処へも行けませぬ。さういふ評判の屏風、それが百両でも買手が無いとい

ふのです。それで何でも嫁さんの里へ引いたのやさうです。今はどうなつたか知りませぬが、鳩居堂の山水の屏風がやましく言はれて居ります、それが廻り廻はつて其処へ行つたものかどうか知りませぬが、大雅の山水は実に名高いものやさうです。

井上と三井さんの関係は、何でも井上の初代の人があたしか但馬の人で之が北さんに出たのです。五代前です、其次の今の当主の四代前の人がお出入をするのに表門を潜りませぬ、堀川の方に出口がありますが其処から出入りして居りました、夜でもこつそり出て行くといふやうなことであつたさうです。其チヂといふものが何でも大分物が読めた男です、何かおかしな判らぬやうな文章でもあると、一寸治兵衛を呼んで来いといふことで「是はどういふことや」「是は斯々いふ訳です」といふ具合であつたさうです。あれの祖父も学問がありまして、学者といふことはありませぬが四書や五経位は読んで居りました。私等もよく父親に祖父が言つて居りました、本を少し位は読まないといかぬと何時も言つて居りました。林茂兵衛は堀川の伊藤の弟子であつて今でも懇意にして居ります。其時分には大変に私の親が伊藤のことを世話して居りましたので、私の所へ寄越せといつて居りましたが、本人の嫌ひの上に私の親も、本屋に本を読まずとおかしな者になる、本屋は標題学者でよい、標題さへ読めたらよいといつて居り

ました。本屋が本を読むとお客扱ひが拙くなるといふのです、慢心するのでせうな。さういふことがあるので、本屋は本を読むことは禁物だ、標題さへ知つて居つたらそれでよいといつて居りました。それでも本屋の丁稚は偉いものです、夜でも倉の中へ行つて何々の本を出して来いといふと直ぐ出して来ます、大学の大的字も知らぬのに何時の間にやら判つて来るらしいですな。

本屋といふ商売は妙な商売で、今と違つて売上金高は少くても口銭は相当にあつたものです。おれ^{※ラレ}半分の意位の口銭は取つて居りました。例へば私の所に此版木があれば是は私の所より外では出来ませぬから一円のものも二円に売つても判らぬ。呉服屋が一年に一万円の商ひをしなければならぬところは本屋では千円売つても立派に引合ふのです。利益が多いものですからおかみさんは絹の着物を着て何時もブラ／＼して居つたものです。林の所だけではありませぬ、何処でも皆贅沢な生活をして居りました。二条の衣棚の風月^{※風月庄左衛門}といふ本屋の母親も何時もぞうつとすそを引摺つて居つたものです。

私が褒めるやうですが、井上といつたら其位の仕事をされるものは江戸にも無かつたのです。家には十四五人しか職人は居りませぬが下職といふものが何百人といつて居りました。何しろ版木屋の三井さんと言はれた程です。江戸、大坂辺の

出版物は皆井上に行くのです。井上の彫刻は日本一ですな。伊勢の方に神宮の曆が出来ます、其曆の刻師が伊勢に居りますが、向ふでは曆さへ刻つてしまへばもう人は要らぬのでそれが井上に出て来るのです。他へは行かぬ。井上へ来れば何時でも使つて呉れるのです。又御所の家来やとか、公卿衆の侍とか、所司代など、さういふやうなところの下侍が居りまして、それ等は禄を貰つて居るけれども年に一二度出ればよいといふ人が沢山あります。さういふ人がぢつとして居つてもしやうがないから版木を習つて居る。それが皆井上に出て来るのです。それで此方は途で遇へば二本さしで威張つて居つても、井上へ来ると「先生々々」とあがめてゐます。物は読めたしなか／＼版屋では井上に越す人はありませぬ。

今の井上の親^{※四代治兵衛明治十六年三月六日歿}は養子です、今の井上が十歳の時に親に離れたので、私が親代りに世話をしてやつて居りました。祖父は長生しましたが今の井上の親は短命でした。井上が子が無いので余所からいろ／＼貰つたのです。がうまく行かなかつたので、店の人の仕事の出来る者を選んで相続人にさすことになつたのであります。初めは感治郎とかいろ／＼の名がありました。が当主になると治兵衛になるのです。私でも初めは芳兵衛ではない、恒次郎でしたが当主になつて芳兵衛になつたのです。林芳兵衛で売れて居りますから矢張代は代つても芳兵衛とした方が都合が好いからです。

今の治兵衛の小さい時には「感」でしたがそれでは書きにくいといつて「勘」にしたのです。祖父も感次郎、今の治兵衛の父親も感次郎、養子になるまでは彌惣七でした。井上の父親の親（養子の親）がきん何とか言ひました忘れませんでした。

井上は版木屋が本業です、蔵版も沢山ありました。祖父といふ人はなか／＼ムツクリした男で人と喧嘩なんかしたことはありません。人の世話はよくしました。昨日も申しましたが出版願といふものが非常に手数が要る。政治などに関係したものは一旦本屋行司から町奉行所に出し奉行所から江戸へ送るといふやうなことで、大変に手間取るので本屋も一寸困つて居つたのですが、井上の祖父はそれが又うまいのです。何故かといふと奉行所の与力なんかには馴染があるからです。

さういふ所から手数が省けたものと思はれます。大坂辺りの本屋でも大抵井上に頼んで居りました。ですから自然井上で彫られます、願は井上に頼んで、彫るのは外へやるといふことは出来ませぬからな。版下の書きやうで刻りがうまく行きませぬ。幾らよく書いてあつても素人ではそれを版下にして小刀の工合が悪いさうです。

刻賃は安いものです。細かいものもあれば大きいものもありますから一定して居りませぬ。井上はえらいものです、刻手が皆揃つて居ります。楷書を刻る人、行書草書と別です。絵を刻る人、絵にもいろ／＼あります。各々其人の得手があ

りまして、絵を刻る人でも字も刻りますが工合が悪い字を刻る人は絵が下手です。それが絵は絵、字は字と刻手の揃つて居るのは井上だけです。井上では下職や何かで何百人といふ人を使つて居りますから、絵のものでも書のものでも何でも引受けます。小口の所は之に刻らず、中の方は之にやらすといふことで、なか／＼出版する本屋でもよく目が利きます。少々はおちてもそれだけ揃ふ仕事師が外にはありません。

え、所は無茶にえ、悪い所は又無茶に悪い、井上ではさういふことがないのです。井上では無茶な人を入れて居りませぬから、江戸へ行つても越後屋治兵衛方で稽古した者は何処でも働けたのです。何千枚といふやうな大きなものは井上でなければ出来ませぬ。出来ても暇がいらいます、外の所で五年もかゝるのを井上では三年位でやつてしまひます、千枚以上のものになると五年も八年もかかります。

それから後に加賀とか紀州とか尾張といふやうな大名で蔵版物を徳川がさせたのです。加賀では四書匯天保七年金沢藩、四書匯參四十三卷、翻刻 是は何千枚といふものです、雲州では南北史、伊勢の津では通鑑をやりました。さういふことを徳川から命じたのです、其代り江戸では昌平学校で物を刻つて居ります。そこで東京にドン／＼仕事師が出来て良い仕事をする人が出来たのです。小刀でも江戸の小刀は又京のものと同じです。刃が薄いかどうか知りませぬが細かいものは東京の小刀でないとい

いかぬといふやうなことを言つて居りました。加賀が四書匯參を刻るに付て刻りを習ひにやつて、習つて来てそれを又國の家中の閑な者に教へて、さうして余所へ持つて行かんでも國で出来るやうになつたのであります。それで御一新までに加賀、尾張などには刻師が仰山居りました。井上あたりでも仕事が多いと加賀などへ持つて行くといふ風でした。それに京の刻りは物價が高いから自然刻賃も高いのです、それで私の父親が名古屋へ行つて名古屋の仕事師を買込んでそれに仕事をさせて居つたことを覚えて居ります。以前は五年も八年もかかつてやつて居りましたが、御一新前後はそんなことは出来ませぬ、急ぎますから、又急がぬといかぬのです。御一新前後といふものは変り方が大変早いので、今はがはやつてよく売れるかと思ふと五年もすると一寸も売れぬやうになる。それで早くやらなければ本屋の方から註文しませぬ。仕事師が沢山無いとさういふことが出来ませぬ。さういう風でなか／＼井上は贅沢な暮しをして居りました。沢山な人を使つてやつて居りましたし、本屋で一円で受取つたものを刻師の方には五十銭しかやりませぬのでえ、儲けになつたのですから、其代り直しは只です。彫つた人は直しをやりませぬ。刻つただけです。直しをする者は又別にあります。井上には直しをする者が五人位居つたと思ひます。多くの人を使つて居らぬと直しをする者を五人も八人も置く訳に行きませぬ。大坂あ

たりの註文は先づ刻りの見本を刷つてやる。さうして一番直し二番直し三番直しまではやります、三番までは井上の方のもちです。四番になると先方から出すのです。三番までやると版木を送つてしまふのです、それ以後は先方の勝手です、何度やつても勝手ですが大抵のものは三番直しですみます。大事な仕事で利益を目的にせぬものは兎も角大抵のものは三番直しで仕上げます。

今のやうに草稿料などは出しませぬ。只です、貝原益軒さんの著述物がありますがあれなんか先方から金を呉れるのです、之を刻つて呉れ、何ぼかゝる。十兩かゝる。そんならどうぞといつて金を十兩置いて行く。さうして版木は此方に買つてしまふのです。百部なら百部刷つて納める。其代価も呉れる、版木は呉れるのではないが預かつて置くのです、やうとも言はない、預かり貰ひです、著作料を取るといふ^(ふ)近來のことで昔はそんなことはありませぬ。御一新になつて明治十年頃から草稿賃一枚何ほといふやうなことになつたのです。私等も大分草稿賃を出して居ります。草稿賃を出しながら刻らずにしまつたものも相当あります。時勢に遅れると草稿賃位は損しても刻つて売出して損するよりも少しの損ですみます。私等も度々さういふことをやりました。此方の目違ひですなあ、外の本屋へやることもあります。何処でも同じことで此方ではいかぬものは外でもいやがります。林芳兵衛が

持つて行つたら尚ほ相手にしませぬ。

井上では刷りませぬ。刷屋は又別にあります。仕立屋もありません。刷屋で大きいのはありません、井上は刻るだけです。刷屋は抱へてあるのです。大きい所になると刷屋を百人位抱へて居ります、よく売れる所では五十人位は大丈夫居りました、尤もさういふ本屋は京に一軒か二軒、大坂にも三軒か五軒位しかありません、大抵の本屋は一人か二人使つて居るだけです、何時もべつたり使つて居る所は余りありません。

銅版は井上は一寸も関係がありません。井上は木版ばかりです。銅版は先日申したやうに小さいものであつたのです。日本の図が出来てから、是は大変便利だ、細かいものは銅版に限るといふことになつたのですが、一ついかぬのは彫るのに手間取ることです、随つて彫賃が高い訳です。

玄々とは日本の図を刻つてから心安くなつたのです。私の方と村上勘兵衛、福井源治郎、井上治兵衛それだけが組んで一つの板を持つたのですが案外是が売れました。

日本の図で玄々と心安くなつて居りましたから此間も申しましたやうに太政官札は木版よりも銅版の方が價が出来にくいといふことを井上の祖父が申言したので、さうして高朗さんから太政官の方へ答へられたのです、それですから玄々が自分の是までになつたのは井上のお蔭だといふことをよく言つて居りました、玄々が明治二年御用召で東京へ行く時に

井上の祖父も私もよばれて行きました。外の人も居りました。井上を上席に据えました。其時井上の祖父に「あなたのお蔭で私も是だけになりました」と礼を言つて喜んで居りました。是が玄々の出世した本です。私の所は漢書や医書が主ですが営業は四五年前にやめました。何でもやらぬものはありません、銅版もやります。昔は京のお医者さんで林茂兵衛の所へ来ぬ人は一人もありませんでした。自分の所の蔵版ものだけではありません、何処の本でも売ります、仲間のことですからお互ひに融通し合ふのです。種類は何でもやりやす雑炊です、仏書だけは知りません、それでも知つた顔をしてやつて居りました。是は知りませぬと言つては信用がありませんから知つた顔をして買つたり売つたりして居りました。此頃は同じことが書いてあつても慶長版だとか昌平版だとか言つてやかましく騒ぎますが、昔はさういふことは余り言ひませんでした。「はこやのひめごと」と云ふ好色本を始めて江戸から送つて来た時に、是は歌書やなと思つて居りましたので、筑前の黒田さんが御上洛になつた。——黒田さんには御出入して居りましたので「何か歌書で珍らしいものは無いか」と問はれたので、「此間江戸から送つて来た書物、あれは新らしいものです」と言つてそれを持つて行つたのです。所が「林芳兵衛あれは歌書ではないあれは好色本や」と言はれたので始めて知つたやうなことです。中島涑園が拵へた春

風一筆といふ二百枚程のものがありませんが、ちやんと版下まで書いて刻らうとしたのですが、引張られるといふので安く売ってしまった。中島文吉が此頃居つたら偉いものですな、あゝいふ山陽でも中島でも時勢を観る明がありました。元禄時代に山陽みたやうなことを言ふとすぐに獄に入れられます、又天保時代に伊藤仁齋が論語の講釈をしても誰れも相手にさせぬ、何といつても先見の明がありました。山陽とか中島といふやうな人は経学には重きを置きませぬ、あの人は主に孟子をやつて居りました、論語なんかは余りやりませぬ。私の父や井上の祖父なんかは中島と心安くして居りました。此頃中島のもが残つて居ります「天保佳話」といふやつです。其版木があります。中島漆園と平塚瓢齋は非常に心安く、山陽とも心安くして居りました。中島も山陽も非常に身持は悪くかつたやうです。酒は呑む女郎買には行く。芝居でも中島が行かんと芝居がはやらんと言つた位です。中島といふ人はなか／＼変つた男です。

三井さんは代々字が上手です。高福さんの書はなか／＼立派なものです。高福さんといふ人はなか／＼徳の多い人でした、高朗さんのことは私の姉がよく言つて居りました、高朗さんは本当にえゝ旦那だといつて涙を流して喜んで居りました。よく氣のつく人でした。

三井の評判、どういふ評判といつた所で其時分は新聞はあ

りませぬし、町の中の評判といつても、旧家で何事に依らず人を救ふといふやうなことはよくして居られました。寒中に非人共にお粥なんかを施行する、さういふことは外では一寸やりませぬ。寒三十日間毎年やつて居られました。三荷か五荷毎日三十日間二条の川原へ持つて行つて非人に施すのです、此家の前を通つて参りました。外ではようませぬ、毎朝油小路から出て二条通を男衆が担いで行くのですが途中でちやんと非人が待つて居つて其処から男衆に代つて川原まで非人が担いで行つて居りました、三井さんとしては何でもないことですが外では出来ませぬ。御一新になつて非人が無くなつてからはそんなことはやめられました、しやうと思つても政府がさせませぬ。

井上治兵衛は十歳の時に父親に離れたのですが、商売は其後もやはり版木をやつて居りましたが、そろ／＼版木より活版の方へ時勢が變つて仕事の註文は減りますし、又しつかりした主人があつてやれば兎も角まだ年は小さい明治六年六月十三日 日生四代治兵衛明

治十六年三月六日歿し自然やめてしまつたのです。其後、三井さんから、中井三平さんのひきで、大学へ入れてやるといふやうな話もありましたが、私は、そんなことはお前等の体に合はぬ、兄弟も無いし、又大学へ行くのなら別に三井さんに頼まんでも少々の貯蓄もあるから行けぬことはないから兎に角お断はりした方がよいといふやうなことでや

めになったのであります。

牧嘉助といふのは太政官日誌の時に井上の町に住んで居たのを井上の帳場に雇つたのです、ブラ／＼して居つたので祖父が自分の家に使つたのです、其後、井上に人が要らぬやうになつて三井さんに頼んで使つて貰つたのです。

第四回 十二月廿一日

訪問聴取者 柴 謙太郎

(速記を作らず)

(談話大要) 本屋の收支計算、元治兵燹^{つて}について中井三郎氏談話の補説、其他前回談話の補説。

速記者 京都市役所、京都市会囑託 岡部荒二

(表紙)

〔中井三郎兵衛談話速記録〕(三井文庫所蔵史料 特八四四)

中井三郎兵衛談話速記録

昭和五年十二月十九日 柴 謙太郎 訪問聴取
京都岡崎同氏邸ニ於テ 尾上米蔵

太政官札の印刷は烏丸御池※元銀座跡で致して居りました。印刷場は拜見致したことが御座います。尾長鳥の通用十三ヶ年限と書いてあつたものです。百円、五十円、五円、一円、二朱、一朱、二歩、一步、何両何歩何朱と言つて居りましたので、一兩札とか五兩札とか、二歩札、一步札、二朱札、一番小さいのが二朱でしたか、さういふ種類であつたと思つて居ります。紙には私の方は関係は御座いませぬ、紙の売買にも関係御座いませぬ。

左様で御座います。父三平※三平天保三年京本店出勤同十三年退役、明治三年北家台所名前役同四年京本店為換座通年京都為換座通勤支配役は若い時から御奉公申上げたのでは御座いませぬ。中年まで商売をして居りました。私が二十歳の時明治四年、未の年と思つて居りますが、以前お前は奉公して居つたのだからもう一遍といふので勤める事になりました。それから二度の御奉公をしたので御座います。さうかうして居る間に銀行が出来たのです、それでちよい／＼銀行の方も手伝ふといふやうなことで後には銀行の方が主になつて段々重役にすゝめられて太政官札の紙のことはさういふ工合で私の方は一寸も知りませぬ。

店は元からあそこ※三條通烏丸東、入梅忠町です、店の恰好は變つて居りますがあの場所御座います。あの店を持つたのは私の三つか四つの時です。唯普通の紙を扱つて居りました。

恵比須屋丈助※兩替店出、入の紙屋といふのは兩替町に夷屋の別家があ

りました恵丈といふのです、島田といふのが夷屋で其別家や
と思つて居りますがどうも記憶が悪いので……

× × × × × × ×

元治の京焼の節、北さんも二度目に焼けました。最初は焼
残つて有難いと言つて居られましたことゝ存じて居ります。

其翌日ズドンと音がして、私の十三の時ですが、焼残りの所
は残らず焼けてしまひました。西が皆残つて居つたのでそれ
を焼いたのです、蛤御門の戦争で焼けたのです。鉄砲を以て
焼くのはわけはありませぬ。鎧兜で血刀を提げて歩いて居る
のを見ました、死体などゴロ／＼転がつて居つたのを薄々存
じて居ります。

今で申しますと殆どステーションあたりまで焼け抜けたと
いふ程の焼方でした。焼け残るとせんぐり焼いて行くのです。
焼ける前に此辺が焼けるから逃げといふ布令が来ます、私共
東の清水まで逃げましたらもつと遠くへ逃げんと戦さになる
からといふことであります。

御一新は、焼けたのが子の年ですがそれから四年目ですか、
まだ四年位では昔のことで十分家が整つて居りません。其時
に何処からともなくバラ／＼とのせの妙見様のお札が降りま
した。何処彼処なしに降りました。降つた家では早速それ
をお祀りします、すると町内から祝が来ます、酒や鰯なんか
町内から来ます。お降りにならぬ家もあります。降つて戴き

たいといつてちやんと家屋根の上に祭壇を拵へて待つて居つ
ても降らん家もあります。やまこに人がそんなものを降らす
のかといふとさうではないのです。近しい中に乱世になるしる
しであつたといふことです。お降りになると商売を休んで浮
かれて歩く、女の人も三味線を弾いて歩くのです。それがあ
つちこつちと方々へ降つて居るので皆大浮かれます。向ふか
らも踊つて来る此方からも踊つて行く、途中ばつたり会ふと
一杯呑まふで又酒を呑む、さうして隣の呉服屋さんへ飛込ん
で真面目な顔して商売でもして居ると踊れ／＼と言つて皆で
引張り出してしまひます。さういふことがあつてから御一新
になつたのであります。

元治の鉄砲焼の時、私<sup>※三郎兵衛文久二年三月京本店
出勤慶應二年九月半元服退勤</sup>は京の御本店
に丁稚でありました。逃げる時は百人程の丁稚を細引で体
をく／＼つてそれを小供頭が引張つて歩くのです。所が血刀を提
げて居る人に出会ふので恐れて逃げたりするので迷子になら
ぬやうに小供頭が連れて歩くのです。一人が小便すると皆待
つて居るといふ風です。今大砲を撃つからといふ布令がある
と其方面の年寄や子供は安全な方面に連れて逃げたり親類に
預けたりします。悪い方の人が入込んで居らぬかといふの
でさういふ疑いのかゝつた所を片つ端から焼くのです。勝さ
んと西郷さんが結託してやつたから東京は無事であつたので
すが、さうでなかつたら東京もやられて居る訳です。年寄を

負うて逃げるやら小供を連れて逃げるやら実に残酷なものでした。焚出しのやうなことも無かつたやうでした。握り飯を銘々に腰につけて逃げたのでせう。焼けた跡は破れた瓦を集めてそれを以て自分の所を境界を作つて、入口だけ開けて瓦で塀を作つて境界にして居りました。町人は余り殺されませぬでした。

× × × × × × ×

太政官札の紙は越前の紙がよいのでさういふことから越前に命ぜられたのです。太政官は東京には無い、京都にあつたのです。三平は三井さんで越前侯に御面会した位です、紙の売買は一寸も御座いませぬ。

× × × × × × ×

(以下、夫人避難談の一節)

一寸治まりがついたので植木屋の二階に女や小供が居りました。下には一つ橋さんが居られて陣太鼓の稽古などして居られました、二階の八畳の間に三つの男の子がありましてよく便所などをやつて居りました、便所をしに下まで行くのが気持が悪いのですな、よく悪戯をしては叱られてびつくりして二階へ飛んで上つて居りました、侍が余程恐ろしかつたものと見えます。